

出生と気象との関連 (第2報)

野々部定祐*・野々部 恒**

(昭和57年9月30日受理)

The Relation of Birth to Weathers (The 2nd Report)

Sadasuke NONOBE and Kō NONOBE

(Received September 30, 1982)

1 地域と資料

熊谷保健所は熊谷市を中心として隣接する大里郡・江南村・大里村・妻沼町の三町村を含んでいる。わが国では大都市周辺の過密化と農村の過疎化が起っている。埼玉県南部・中部は東京都に隣接しているために東京のベッドタウンとして、都市化と、その結果の過密化が進行している。それと同時に通勤に困難な隣接町村の周辺部では過疎化が起っている。熊谷市は埼玉県中部の中都市であり、大里・江南の両村、特に大里村では荒川にかかる橋と道路の関係で、所によっては過疎が起っている。

今回は出生について昭和48年より昭和53年までの6年間、人口については昭和48年より昭和52年までの5年間の人口の増加を記録した。

2 観察方法及び結果

今回も熊谷保健所の年報の資料になる出生票によって昭和48年より昭和53年までの出生を管内全域および各市町村について観察したところ、表2から表6までの如く、出生数および季節指数¹⁾を認めた。市町村から得た人口の推計の情報より各市町村および全管内の推計人口は表1の如くなり、昭和48年より52年までの人口増加指数を計算したところ、表1の如くなった²⁾。推計人口と出生より、出生率を計算すれば表7の如くなった³⁾。

3 考察

人口の推移を見るに、表1の如く、管内全域で8千程度であるが、48~52年の人口増加指数²⁾は全域で104.8

%であり、大里村が101.9%で最も少く、熊谷市が平均より少々低いが殆んど、それに近く、妻沼町が109.0%で最高であった。

熊谷保健所管内全域では表2の如く、出生の季節指数は11月が91.5%で最低であり、次に12月が92.4%で、更に6月が93.7%で、それに続いていた。

$$\text{季節指数} = \frac{\text{各月平均}}{\text{全期間平均}} \times 100\%$$

熊谷市の出生は表3の如く、季節指数は11月に90.5%となり、12月に91.7%となり、6月は94.1%となり、11月、12月は全域より小さく、6月は全域より大きかった。大里村では表4の如く、出生の季節指数では6月11月ととともに74.9%の最低値があった。

江南村では表5の如く、出生の季節指数は5月に81.4%の最低の季節指数を認めたが、11月、12月はともに100%以上の季節指数であった。

妻沼町では表6の如く、出生の季節指数は2月に87.6

表1 熊谷保健所管内の人口の推移

年度	管内	熊谷市	大里村	江南村	妻沼町
48	165,071	128,207	6,785	8,885	21,194
49	167,551	129,968	6,847	9,084	21,652
50	169,715	131,486	6,790	9,164	22,275
51	171,217	132,259	6,815	9,368	22,775
52	172,956	133,283	6,912	9,475	23,286
48~52年の人口増加指数	104.8	104.0	101.9	106.6	109.9

* 栄養学第一研究室

** 国際学院

野々部定祐・野々部恒

表2 熊谷保健所管内の出生の推移

年 度	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
48	257	277	265	255	277	223	266	268	278	263	240	260
49	276	213	260	285	255	248	293	273	299	290	255	251
50	236	245	220	240	243	226	264	269	247	252	216	222
51	260	235	241	251	201	218	251	265	237	228	206	217
52	203	209	216	198	245	216	232	249	210	254	206	188
53	213	202	235	214	236	214	227	224	215	226	190	189
季節指数	100.6	96.2	100.1	100.5	101.5	93.7	106.8	107.8	103.5	105.4	91.5	92.4

$$\text{季節指数} = \frac{\text{各月平均}}{\text{全期間平均}} \times 100$$

表3 熊谷市の出生の推移

年 度	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
48	218	215	206	194	220	183	222	217	226	214	186	209
49	230	158	213	234	200	203	249	233	243	227	206	212
50	182	194	168	195	201	183	216	210	191	193	157	166
51	206	190	177	195	163	174	202	216	180	184	160	178
52	159	168	167	148	198	163	179	188	154	200	163	144
53	165	152	179	170	181	161	170	174	169	175	154	131
季節指数	102.3	95.0	97.9	100.2	102.5	94.1	109.1	109.1	102.5	105.2	90.5	91.7

表4 大里村の出生の推移

年 度	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
48	9	12	10	9	10	5	5	13	6	10	10	8
40	6	12	14	8	13	7	10	11	13	11	7	6
59	6	8	5	9	10	4	11	18	10	15	6	11
51	7	11	15	12	7	8	6	11	10	7	7	10
52	4	10	5	8	7	7	6	12	7	12	7	7
53	10	14	10	10	5	9	9	6	9	6	3	7
季節指数	78.7	129.2	110.5	104.9	97.4	74.9	88.0	133.0	103.0	114.2	74.9	91.8

出生と気象との関連（第2報）

表5 江南村の出生の推移

年 度	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
48	5	16	14	11	9	11	11	10	10	12	18	20
49	12	19	7	9	14	13	11	10	13	23	10	14
50	12	13	9	10	6	11	9	5	13	8	8	9
51	12	15	14	18	5	9	7	7	16	13	12	1
52	14	8	14	18	11	14	12	6	10	14	12	11
53	9	8	10	8	12	9	16	13	10	16	9	16
季節指数	91.4	112.2	97.7	105.5	81.4	95.7	94.3	87.1	102.8	122.8	107.1	101.4

表6 妻沼町の出生の推移

年 度	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
48	25	34	35	41	38	24	28	28	36	27	26	23
49	28	24	26	34	28	25	23	19	30	29	26	19
50	36	26	38	26	26	28	28	36	33	36	45	36
51	35	22	35	26	26	27	36	31	31	24	27	28
52	26	22	30	24	29	32	35	33	39	28	24	26
53	29	28	36	26	38	35	32	31	27	29	24	35
季節指数	100.6	87.6	112.3	99.4	103.9	96.1	102.2	100.0	110.1	97.2	96.6	93.8

表7 管内市町村の出生数

(出生率の推移)

	管 内	熊 谷 市	大 里 村	江 南 村	妻 沼 町
昭和48年	3,129(19.0)	2,510(19.6)	107(15.8)	147(16.5)	365(17.2)
49年	3,198(19.1)	2,608(20.1)	118(17.2)	161(17.7)	311(14.4)
50年	2,880(17.0)	2,256(17.2)	117(17.2)	113(12.3)	394(17.7)
51年	2,810(16.4)	2,225(16.5)	108(15.8)	129(13.8)	348(15.0)
52年	2,626(15.2)	2,031(15.2)	93(13.5)	154(16.3)	348(14.9)

%の最低値を認めたが、次に少い値は11月の93.8%と6月の96.1%とであった。

表8の如く、年別の出生率³⁾では管内全体と熊谷市・江南村・大重村では昭和49年を頂点として、減少して来たが、妻沼町には昭和50年を頂点として減少して来た。

すなわち、妻沼町は人口増加を町の政策としている結果ではないかと思われる。

昭和48年より52年までの5年間の熊谷保健所管内の月別出生数を職業別に観察したところ、第1報の如く、専業農家は5月に、兼業農家は6月に季節指数の減少があ

り、勤労者はホワイトカラー・ブルーカラーともに5、6月の減少ははっきりしないが、11月には両者とも季節指数の減少を認めた。自営業者では11月にはホワイトカラーとブルカラーの中間の値を取り、5・6月の季節指数では農家程ではないが、少々小さい季節指数を認めた。熊谷駅に便利な市内、および江南村、交通の便利な妻沼町は人口の増加が多いが、熊谷駅に荒川に柏かる橋および道路の関係で出にくい大里村では一部に過疎化が進行していると考えられる。

管内全域では表2の如く、季節指数は6月には93.7%の低値と11月に91.5%の最低値を認めるので、管内全域では農家のパターンより勤労者のパターンが強く、熊谷市では表3の如く、6月には94.1%の低値を認めるが、11月には90.5%の季節指数なので、市内は更に都市化と勤労者の増加がはっきりしているようである。

大里村では6月と11月とに74.9%の季節指数を認めたので、専業農家と勤労者のパターンを持っているのではないかと考えられる。江南村は5月に81.4%と言う著明な専業農家の特徴を持つ季節指数の最低値を認めたが、11月、12月にははっきりした季節指数の減少がないから農業の色が濃く出ていると思われる。

妻沼町では6月と11月とに季節指数は低値を示したが、最低値の87.6%は2月であったので、2月の最低値は人口増加に対して政策を持つ町の行政の影響にはないかと

考えられるが、はっきりしない。6月と12月の低値が、96.1%と93.8%で、ともにそれほど著明でないので、農家の兼業化と都市化が同時に進行していると思われる。

4 結 論

以上を総合して、熊谷保健所管内では都市化が進み、特に熊谷市では著明である。大里村は兼業農家と勤労者の多いパターンを示すが、一部には過疎化も進んでいる様である。江南村は未だ専業農家の特徴を持っているが、一部は都市化しつつある。妻沼町は兼業農家が増し、都市化を進行している。人口増加の政策もある程度、行政的效果を上げている。

本論文の要旨は第44回、日本温泉気候物理医学会総会昭和55年5月13日に神奈川県横浜市県民ホールで発表した。

文 献

- 1) 立川 清：改訂増補衛生統計テキスト，第一出版KK，東京，昭和50年10月，150頁
- 2) 立川 清：改訂増補衛生統計テキスト，第一出版KK，東京，昭和50年10月，166頁
- 3) 立川 清：改訂増補衛生統計テキスト，第一出版KK，東京，昭和50年10月，104頁